「痴呆」の国語辞典等登載史

年代	一般用語＝あほう	年代	医学用語＝Ｄｅｍｅｎｔｉａ
		1872（明治5）	「医語類聚」 Dementia　狂ノ一種
		1908（明治41）	呉　秀三がDementiaの訳語を「痴狂」から「痴呆」に改めることを提唱した。
1917（大正6）	大日本国語 用例なし		
1919（大正8）	有島　武郎　「或る女」後・三四 「如何かして倉地を痴呆のやうにしてしまひたい」		
1920（大正9）	寺田　寅彦　「丸善と三越」 「其贖罪の為に種々の痴呆を敢行して安心を求めんとする。」		
		1927（昭和2）	研究社新英和大辞典 dementia　［名］精神錯亂、發狂；（醫）瘋癲、痴呆
1934（昭和9）	広辞林（新訂版） ちほう［癡呆］（名）あはう・ばか。		
1955（昭和30）	広辞苑（第一版） ちほう［痴呆］　脳の障害のため、精神作用が一部或は全部崩壊・滅失した状態。ばか。あほう。		

平成３年１０月１９日
日本医事新報　No.３５２１

「痴呆」という言葉、「呆け」という言葉
ー敬老の日に寄せてー

井手　佐武郎

ここ数年、お年寄りの患者さんや、その家族の人達と接触する機会が多くなっている。そのせいか、今迄はさほど感じていなかった「痴呆症」「呆け老人」などという言葉が、公用語、医学用語として氾濫していることが気になり出して来た。

人生の終末期にある老人の何パーセントかにおこる精神障碍をさして、なんといういたわりのない、見苦しい表現であろうか、このまま見すごしてよいものだろうかと考えるようになった。そして、本当に考えるに値する事柄かどうかを見究わめることから始めることにした。

手初めに、近くの区立図書館に行って、中級以上の国語辞典、漢和辞典の「痴呆」の項を検討した。二カ所の図書館で二三点だった。以下、これらを発行年代順に列記する。

①新字鑑（昭二八）、②辞海（昭二九）、③広辞苑（昭三〇）、④広辞林（昭三三）、⑤角川漢和中辞典（昭三四）、⑥言林（昭三六）、⑦角川国語辞典（同）、⑧大辞典（昭三八）、⑨字源（昭四〇）、⑩三省堂漢和中辞典（昭四二）、⑪岩波国語辞典（昭四四）、⑫新修漢和大辞典（昭四五）、⑬新辞源（同）、⑭大言海（昭五一）、⑮学研漢和大辞典（昭五七）、⑯学研国語大辞典（同）、⑰新潮国語辞典（同）、⑱旺文社漢和大辞典（同）、⑲大辞林（昭六三）、⑳漢字源（同）、㉑三省堂国語辞典（平成一）、㉒日本語大辞典（同）、㉓朝日現代用語知恵蔵（平成二）。

この作業で分かったことは、次の二点であった。

（１）「ばか」「あほう」「おろかもの」等とだけ記述しているもの一〇、医学用語との併記が一一、医学用語のみは僅かに二点（㉒㉓）であり、いずれも医学者が編集者として名を連ねている。

（２）発行年代順に列記してみたものの、年代的には余り有意差は認められず、編者が国語学者か中国文学者であるかによって、医学用語として認めているか、いないかに分れている。

それならば、痴呆（または癡呆）という言葉が、西洋医学を基とする日本医学の中で、いつの頃から出現したのであろうかと思い至って、母校ー慈恵医大ーの大学図書館に行ってみた（迂闊だったのは、母校は大正一二年の関東大震

災によって全焼したということを、すっかり失念していたことだった)。

まず医学辞典から始めた。現在多用されている「痴呆」の語源は、紛れもなく「Dementia」であり、明らかに「精神障碍」または「知能障碍」である。僅かに残存している古い辞書を探し出した。

（1）医語類聚（明一一）：Dementia，狂の一種。

（2）ノイエスメデチニッシュウエルターブーフ（明三五。金原医籍店）：全癡瘋癲、癡呆。

（3）臨床医学辞典（明三六。南山堂）：痴呆、瘋癲。

（4）独羅英和新医薬大辞典（大一二。金原書店）：Dementia,痲痺狂、D.Seniles, 老人性癡呆。尚、独逸医学辞典（明一九）にはDementiaの記載はない。

大学図書館一階に広大なスペースを占めている「医学中央雑誌」（明治三六年初刊、現在に至る）の精神科の「痴ー癡呆」に関する文献を、昭和八年に至る三六巻に目を通した。他科に較べて数少ない精神科文献の中で、白痴、癡愚、痴鈍、瘋癲等々の文字の多さに、たじろぐばかり。たとえば第六巻（明四一。七五〇頁）「白痴の病理解剖云々」「一九才儒弱性癡愚男子云々」。

すっかり気が重くなった作業を進めているうちに、第九巻（明四四ー四五）の門脇真枝の論文（第三回日本医学会誌）中に、

《精神病学の訳語に就きて所謂「癡呆」又「癡狂」と云う病名の使用を廃すべきこと。

癡呆又は癡狂と云う病名は字義不穏当にして之が為世間及び患者の嫌忌誤解を来し加え、元来癡と云う字は絶対汚缺を意味するものなるが故に……　以下略》

という文章に出遇った時の感動を小生は生涯忘れないだろう。

第一五巻（大六ー七）「老虐性痴呆」と題する東大・呉秀三教授の講義、つづいて第一六巻に同病の標本供覧「アルツハイマー云々」、第三五巻（大七）東大・三宅鑛教授の「老衰期に現わるる精神異常、初老期精神病、アルツハイマー」といった演題が目について来たところで、医学中央雑誌の拾い読みを打ち切った。

結局どうということもなかった。明治の初めの頃、西洋医学が日本にどっと流れこんで来た時代、日本では精神病は厄病視され、あらゆる侮蔑的な言葉を用いることに、官界も多くの医学者達も、ためらうことがなかったということなのだと、小生は知った。

「ばか」「あほう」を和英辞典で引けば、foolであり、idiofであって、決してdementiaではないはずである。時代の風潮がそうさせた、心ない多くの医学者がそれをうけついで来た、と小生は思う。

そこで話を現在にうつすことにする。

精神医学大事典（講談社、昭五九）S教授によれば、《「知能障碍」：知能がな

んらかの原因で障碍され低下すること。軽度、中等度、重度の障碍に分けることが出来る。重度のものを「痴呆」という》とあるが、「重度」の説明に「痴呆」という語句は唐突であり、無用ではないか。

メンタルヘルス解説事典（中央法規出版、昭六二）、《痴呆とは成人に起こる知能障碍で通常の生活に支障を来すほどの重篤なものを云う－中略－高齢期になるにしたがって出現頻度は増加する》。この場合、病態の説明は明快であるが、これまた「痴呆」という字句を用いる必要性は認められない。

同じ事典のH教授の論説中、《“ぼけ”と云う用語はもともと通俗語であるため、人によって多様な意味に使用されている。“ぼけ老人”という場合は痴呆をもつ老人と同義であり、健康な老人の体験する“もの忘れ”と、“痴呆”の中間を指す学者もいる。最近は、むしろ広く高齢者の著明なもの忘れを意味し、“痴呆”を含んだ広い概念として使う人が多いが、厳密な用語とは云えないので、なるべく使用しない方がよい》とあるが、“ぼけ”が俗語であるからと言うのなら、“痴呆”は何語とおっしゃるおつもりか。

“ぼけ”とは、“呆け”であり、語意は矢張り「ばか」「あほう」であるが、更に広くぼかす、あいまいにする、とぼける等々と転用もされている、一種ユーモラスなニュアンスを持つ言葉でもある。近頃の流行語「ファジー」な用語であり、精神科領域で用いられるのにも至極便利な言葉だったのだろうと小生は思っている。

ここ数ヶ月は、小生にとって「痴呆」という言葉との苦闘の日々であった。とにもかくにも、それに終止符を打つ。

うつろな安らぎ、とでもいうのだろうか。戦後世代が人口の三分の二にもなった現在、「痴呆」という言葉にすっかり馴らされてしまって、何とも感じない人々の方が多くなっている。諦めるしかないのだろうか。

［附記］　岩波国語辞典（一九六九年版）から「痴」の項を抜粋する。《頭の働きがにぶい。思慮分別が足りない、ぬけている。おろか。「痴愚・痴鈍・痴呆・痴者・痴人・愚痴・白痴・音痴」。特に色情についていう。「痴漢・痴情・痴態・痴語・情痴」》。

平成５年５月１５日
日本医事新報　No.3603

呉秀三と門脇眞枝

ー重ねて痴呆という言葉、呆けという言葉ー

井手　佐武郎

「痴」という字は岩波国語辞典によると、「おろか、痴愚、痴鈍、痴呆、痴者、痴人、愚痴、白痴、音痴。特に色情についていう。痴漢、痴情、痴態、痴話、情痴」等とある。「呆」という字は多くの辞典で、ばか、あほうの意とされているが、更に広く転用され、ぼかす、あいまいにする、とぼける等につながっている。

最近、精神科領域で多用されるようになっている「呆け」は、「痴」と違ったニュアンスを持っていて、他に言い表わし難い便利な言葉だと小生は思っている。

老齢期に屢々起こってくる精神障碍を、むごい不快語にすぎない「痴呆」という言葉で表現されるようになった起源を調べ出して三年余になる。平成三年十月十九日、本誌第三五二一号に「痴呆という言葉、呆けという言葉」と題して、小論を発表させて頂いた。その後、興味ある知見を得たので、続篇として書いてみる。

昔日は「人生五十年」と言われていたくらいだから、高齢者の精神障碍は社会的にも医学的にも、さして問題にはなっていなかったのだろう。戦前は一般辞書では「痴呆」は、ばか、あほうの意とのみ表現されていたのが大部分だったが、戦後になって医学用語と併記されるようになり、平成期に入って「医学用語」としてのみ取り上げている辞書が目立っている。

明治期、西欧医学の導入に当って、医学界ではそれぞれの分野で学術用語の邦語訳出が急がれていた。その中でも現今、日本精神医学中興の祖と仰がれている、東大精神科・呉秀三教授の日本語訳は徹底していた。

《東京府巣鴨病院の病床日誌、臨床講義の筆記はみな日本語を以て記載するを例とした。　ー中略ー　医科大学附属医院では他の分科では概ね独逸語を以て病床経過を記述するのが常であった。》（斎藤茂吉「呉先生を憶う」ー『呉秀三小伝』より）

《専門的訳名に対して狂の文字を常に忌まれた。そして従来「デメンシア」を痴狂と訳していたのを明治四十一年頃より改めて痴呆と訳出せんことを提唱せられたのだが今日では遂に是が通有名となって仕舞ったのである。》（北林貞

道「我邦斯学の革命者たる呉秀三先生」（S四八）[1]－『呉秀三小伝』）。

これで「痴呆」の出自がはっきりしたのであるが、先の小論でふれた門脇眞枝という無名の一精神病学者について知り得た事実の一端をお伝えしたい。

彼は、明治五年（一八七二）島根県松江市近郊の大根島で出生（呉は一八六五年出生）。父は地元の小学校校長であり神官であった。彼は松江市洋々中学校在学中（十五歳）小学校教員検定試験に合格、十八歳で神官三等試験に合格、二十三歳で医術開業試験に合格、約一年東大医学部内科で研修後、精神科教室に入局している。

呉は六年早く同科に入局、助教授に就任していて、更にその一年後、四年間に及ぶ欧州留学に旅立っている。門脇は、その間、精神科講座を兼任した片山國嘉・法医学教授の下で、狐憑病新論、精神病学、精神病看護学等の著述や論文を次々と発表しているのだが、呉が帰国した明治三十四年の同月に巣鴨病院を依願退職し、私立王子精神病院院長に赴任している。

前述したように、呉は明治四十一年頃に痴狂という語を痴呆と訳することを提唱しているのだが、その二、三年後の医学中央雑誌第九巻に、『精神病学上所謂「痴呆又癡狂」ト云フ病名ノ使用ヲ廃スベキ事』と題する門脇の論文が見られる。原文のまま抜萃する。

《現今新ニ多ク使用サル原語ニ就キテハ之ヲ如何ニ訳スベキカ今ナホ甲翻乙訳一定セザルニハ非ズヤ　－中略－　是レ実ニ後進家医学生ヲシテ拠ル処ニ惑ハシムル弊害アルガ故ニ之ヲ一定スル事ハ斯学ノ発展普及上最モ肝要ニシテ緊急ナル問題ナリ　－中略－　速カニ吾ガ医科文科法科等ノ有志相集リ訳語会ヲ組織シ訳スベキ原語ハ之ニ適当ノ訳ヲ附シ訳シテ却テ原語ノ意義ヲ損スルガ如キモノハ原語其儘ニ使用シ適当ノ解釈ヲ附スル事穏当ナリ

所謂「痴呆又ハ癡狂」ト云フ病名ハ字義不穏当ニシテ之ガ為世間及ビ患者ノ嫌忌誤解ヲ来タシ之ガ取扱上及ビ診療上等ニ少カラザル障碍ヲ来シ易ク加之元来癡（痴）ト云フ文字ハ実際絶対汚玖ヲ意味スルモノナルガ故ニ僅微ノ精神衰弱ヲ呈スル者ニモ恢復スベキ可能性ノ者ニモ之レガ病名ヲ下ス事不適当険悪ニシテ実地臨床上ノ状態ニ適セズ　－以下略－　》

この論文の裏に、私学出身の無名の一学徒の同門の最高権力者に対する激しい反発の姿勢を感じるのは、小生の思いすぎだろうか。

ともあれ、「痴呆」という文字の氾濫は年を逐ってますます激しくなって来ている。

---

[1] 「呉秀三小伝」は昭和８年に呉博士伝記編纂会により刊行されたものである。文中で刊行年が「S四八」とあるのは、精神医学神経学古典刊行会が昭和四八年に刊行した複製を指しているものと思われる。（「痴呆」に替わる用語に関する検討会事務局）